56）解体新書以降の医歯学書に見られる歯科用語の変遷

Transition of the Anatomical Nomenclature of Teeth after the "Kaitaishinsho"

九州歯科大学　○嶋村昭辰，小林　繁
北九州市　　上瀉口　武

Akitatsu SHIMAMURA, Shigeru KOBAYASHI and Takeshi KAMIKATAKUCHI

去年の第29回日歯医史学会において「解体新書」以降の頭蓋・顔面骨用語の変遷について発表したが，今回はその続きとして現代の解剖学名用語にいたる歯牙用語の変遷について報告する．参照した主な医歯学書は解体新書(イ)，重訂解体新書(ロ)，正骨範(ハ)，整骨新書(ニ)，解剖訓蒙(ホ)，解剖攬要(ヘ)，解剖学名彙(ト)，改訂解剖学名彙(チ)，新舊對照解剖学名集覧(リ)，新旧対照解剖学名集覧(ヌ)，臨床歯牙形態図説(ル)，歯学史資料図鑑一目で見る歯学史一(ヲ)，歯学史料(ワ)，明治時代発刊の医学書にみられる歯科にかかわる医学用語(カ)などである．おもな結果は次のとおりである．

一．(イ)と(ロ)の用語対比（上から切歯～知歯の順）．

(イ)板歯，犬牙（眼牙），齟歯，眞牙

(ロ)齬歯，犬歯（眼歯），槽歯（粉歯），成歯

板歯と齟歯は「和名類聚鈔」にみられる古い用語である．齬歯は，後出の「齬歯」とともに機能上から付けられた古い名称か．犬歯の別名は蘭語原書に"Oogtanden"と明白であるが，槽歯の別名については"Maaltanden"とあり，粉歯という呼称もあるということか．知歯名は両書とも永久歯と間違いやすいが，原書のラテン語名はD. sapientiaeである．

二．(ハ)と(ニ)の例はほぼ同じで，門牙（歯），虎牙（歯），槽牙（歯）で，知歯名を欠く．

三．(ホ)と(ヘ)は明治5年と14年のもので，前者は米国ペンシルベニア大学で，後者は東大での教材である．前者に特有な訳用語が見られる．

齬歯（前歯），双点歯（小臼歯），腭歯（大臼歯），慧歯（知歯），さらに犬歯の別名に眼歯のほかに「胃歯」も加えている．

四．(ヲ)で紹介されている「全體新論」及び「歯科全書（口腔外科学図解編）」，(ワ)の中の「小学人体問答（その一，その二）」，(カ)の中の「初学人身窮理上巻」，他で挙げられている用語を一括して引用する．

切　歯＝門牙，門歯，前歯
犬　歯＝弐牙，角歯，尖歯，尖頭歯
小臼歯＝二頭歯，顴歯，前臼歯，前大臼歯
臼　歯＝臼歯
大臼歯＝大牙，大臼歯，後大臼歯
知　歯＝智歯，知歯

以上はすべてオフィシャルな解剖学名制定前のものであるが，各歯の形態，位置，機能上の特徴を捉えたバラエティーに富む用語である．

ラテン語による解剖学用語の世界的統一が図られたのが明治28（1895）年のBasel Nomina Anatomicaの認定からである．日本語用語の制定は，それより10年遅れて(ト)で門歯，犬歯，小臼歯，大臼歯，後生歯（眞牙D. serotinus）と発表された．1932年の(チ)では後生歯が智歯に，1944年の(リ)では門歯が切歯に改められて現在にいたる．

五．(ル)では，(イ)，(ロ)，(ホ)の用語対比が既に行われ，さらに「食養新聞」のユニークな食能分類用語（中原市五郎）も比較されている．また，以上に挙げていない古い用語や発生学上の用語も多く掲載されている．

六．現代の国語辞書には「門歯」はあっても解剖学名としての「切歯」は掲載されず，「切歯やく腕」の切歯の説明だけである．